

日本の皮革地帯

— 姫路・龍野と木下川を中心に —

川上隆志

一 「いくつもの日本」の視座から

二〇世紀の日本では、近代化の推進役として「ひとつの日本」志向が強固であった。それは政治においても経済においても文化においてもそうだった。マイナーなもの、メインの流れに反するものは、切り捨てるか隠蔽してきたのである。しかしそうした近代の行き詰まりが明確になった現在、必要なのは「ひとつの日本」から「いくつもの日本」への視座の転換である。シリーズ「いくつもの日本」の第一巻『日本を問い直す』の総論で、赤坂憲雄は次のように述べている。

「日本とは何か、日本人とは誰か、日本文化とは何か。いかにも古色蒼然とした問いではある。しかし、あくまで歴史的に問いかけようとするとき、それらもはや自明なるものとして存在するわけではないことに、いやおうなしに気付かされる。それらは揺らぎのなかに投げ込まれ、ただ、抱かれるべき問いの群れとしてのみ存在する。根底からの日本像の転換こそが求められているのではないか。たとえばそれを、「ひとつの日本」から「いくつもの日本」への転換と呼んでみる。この列島のそこかしこに、少なくとも数万年の時間を宿しながら繰り返り広げられてきた、たとえば民族的景観について思いを巡らす。いま、それを新たな方位に向けて拓いてゆくためには、まず「ひとつの日本」の呪縛をほどいてやる必要がある。そこにあふれ出す、数も知れぬ「いくつもの日

本」のかけらが新しい歴史を紡ぐ手がかりとなるだろう。そうして、弧状なす列島の民族史的景観をやわらかく重層化させてゆきたい……」¹⁾

ここに言われている「いくつもの日本のかけら」を、さまざまなどころから探り出していくことを、日本文化史の課題としていかなければならない。天皇、京都、東京といった体制に依拠し、大文字で語られてきた日本文化論に代わって、地域に視点を置き、多様な時間軸を設定し、価値の重層性を認めた日本文化論に書き換えられなければならない。

そのための方法論として新たな示唆を与えてくれるのが、中沢新一の『精霊の王』である。これは「宿神」をめぐって芸能者の精神史を、ひいてはアジアに拡がる古層の神々の精神史を明らかにしたものである。稲作農耕をする常民に対し、その秩序を揺るがせ、文化のダイナミズムをもたらすものこそ芸能民であるとし、禅竹の『明宿集』を大胆に読み解く。そこに浮上する芸能民の精神史こそ、「いくつもの日本」の姿のひとつに違いない。「宿神」の性格を中沢は次のように述べる。

「今日、「日本文化」の特質を示すものとして世界から賞賛されている芸能と技術の領域を守り、そこに創造力を吹き込んでいたのは、この列島上からすでに消え失せてしまったかと思われた、あのシャグジリ宿神というとてもなく古い来歴を持つ精霊だったのだ。(中略) まったくこの宿神なくしては、今日言われているような「日本文化」などというものさえ、存在することはできなかつたかも知れない。」²⁾

そしてこの宿神は、「制度や体系の背後に潜んで、背後から秩序の世界を揺り動かし、励起し、停滞と安住に向かうとするものを変化と創造へと、駆り立てていく」のであり、この精霊を「哲学的思考の中によりがえらせることよって、私たちの今日抱える深刻な精神的危機に、ひとつの突破口が開かれるかもしれない」と説く。

平準化され活力を失っている現代日本の文化状況に風穴を開けるにはどうするのか。そのひとつの答えが、「いくつもの日本」という方法論的視座を導入して、多様な日本文化の諸相を捉えなおし、今はまだそこかしこに露見しているものの、消え去りつつある人々の営みを再構成してゆくことなのである。

従来の稲作農耕を中心に据えた日本文化史観では隠蔽されてきた職人や芸能民たちの文化、そこにもっと注目する必要がある。それは中沢の言う「縄文的な野生の思考」の再生でもあり、「新しい思想史」の構想でもある。

本稿では、こうした問題意識に基づきつつ、日本の皮革文化を考察する。皮革は武器や工芸品として、歴史的にきわめて重要な産物であった。にもかかわらず、皮への穢れ意識によって、皮革産業に従事する人びとは、いわれなき差別を受けてきた。それはいったいなぜなのか。この差別を払拭するために、まずは日本の皮革文化の中心地を実際に歩き、実像をとらえ、その歴史をたどることが必要である。

二 播磨の渡来系文化

皮革文化の拠点として本稿で取り上げる姫路・龍野を含む播磨一帯が、古代において渡来系文化の一大中心地であったことはよく知られている。新羅の王子とされるの天日槍あめのひざの渡来神話はその代表である⁽¹³⁾。ここで播磨と渡来系文化のかかわりを見ておくことにする。なぜならば、皮鞆あづなは、重要な渡来系文化の一つだからである。

和銅六（七一三）年の官命によって編纂された『播磨国風土記』には、多くの渡来集団や渡来系人物に関する記事が四〇例ほどあるという⁽¹⁴⁾。一例をあげれば、現在の姫路市白国一帯は新羅訓と呼ばれていたが、その起源として、次のように記述している。

「昔、新羅の国の人、来朝しける時、比の村に宿りき。故、新羅訓と号く⁽¹⁵⁾」。

これ以外にも、渡来人にかかわる記述は随所に見られる。そもそも編者とされる楽浪河内も渡来系二世だったのである。

また播磨の山岳地帯は古代の鉄の産地だった。『播磨国風土記』⁽⁶⁾ 讃容郡の条には、

「鹿を放ちし山を鹿庭山と号く。山の四面に十二の谷あり。皆、鉄を生ず。難波の豊前の朝廷に始めて進りき。

見顕しし人は別部の犬、其の孫等奉発り初めき」⁽⁷⁾

現在でも、穴禾郡千種町には「たたら里学習館」がある。ここは天兒屋鉄山の跡地であり、伝統的なたたら製鉄の様子が学べる。千種町一帯にはたたら遺跡が散在しており、古代以来の製鉄の隆盛振りがうかがわれる。また備前の長船などの著名な刀匠も、ここの千種鉄を用いていたという。

さらに播磨の沿岸部は古代より製塩が盛んだった。ここでは紹介しないが、『播磨国風土記』には製塩関連の記事も頻出する。製塩も鉄も渡来系の文化である。また西隣の吉備国は、古代には渡来系の吉備氏が一大政治勢力を形成していた。唐の文化をもたらしただけで有名な吉備真備も、吉備氏の一族である。吉備氏は海上交通を掌握していた事から、大陸から伝わった米作も早くから盛んであったと考えられる。このように塩、鉄、米という、古代の渡来系の重要な技術が播磨の周辺にはあった。

また中世から近世にかけては、播磨は民間陰陽師の一大中心地であった。古くは堀一郎⁽⁸⁾、最近では沖浦和光⁽⁹⁾の研究によつてその実態がかなり明らかになっている。陰陽師とは、もともとは宮廷で陰陽道の式占・祭祀や祓を行なう呪術宗教家の職種名であったが、中世以降では、民間にあつて有史以来のシャーマニズムと渡来系の民間道教系の巫術に連なる遊行者のことを指すようになった。その代表が、安部清明に法術比べで敗れたとされる芦屋道満である。

興味深いことに、中国山地の山並みが多岐に繋がる佐用町に、小さな谷をはさんで芦屋道満と安部清明の塚が

並び立っている。一三四年に成立した『峰相記』は、播磨峰相山鶏足寺に参詣した僧と同寺の住僧との問答形式で展開される中世播磨国の地誌であるが、それによれば、安部清明との法術比べに敗れ、播磨に流罪となった芦屋道満の末流が播磨一帯で活動したという。近辺に住む陰陽師たちが、両方の塚を祀ってきたのだろう。そして沖浦が明らかにしたように、彼ら陰陽師たちもまた渡来系の集団の末裔だった。

陰陽師たちは、さまざまな呪術を施すとともに、門付けなどの芸によっても身を支えていた。近世になると、その末裔たちは役者村を形成する。農村歌舞伎の役者として人気を博し、播磨一円のみならず全国に興行に回っていた。その雄が、柳田国男の生地・北条町で発祥した「高室芝居」である。農村歌舞伎は娯楽のなかった時代の人々にとつて、何よりも楽しみとなっていた。今でも当時をしのばせる「上三河の舞台」が佐用郡南光町に残されている。

さらに赤穂には大避神社おあきけがある。世阿弥の『風姿花伝』や榊竹の『明宿集』によれば、秦氏の長・秦河勝が金春の先祖に猿楽を教えた後に、摂津から海に乗り出し、播磨の坂越さかしに漂着した。荒ぶる神として暴れた後に、宿神とあがめられ鎮められると、靈験あらたかな神となった。その秦河勝を祀っているのが大避神社である。ここも重要な渡来系文化の拠点である。⁽¹⁰⁾

神社といえは広峰神社に触れねばならない。姫路市の北方、広峰山の中腹に鎮座する広峰神社は、主祭神は素盞鳴尊すさのおのみことで、もとは広峰牛頭天王社といわれた。社伝によれば、吉備真備が唐より帰国した後、神託を受けて天皇に奏上し、社殿を造営したという。平安時代には、御霊信仰と疫病神が盛んになる中で、素盞鳴尊と習合した牛頭天王が祀られた。一〇世紀中ごろに、それが京都の八坂に勧請されて、祇園社（八坂神社）となったといわれる。

中世を通じて広峰神社は、広く民衆の信仰を集めていた。『峰相記』に「自国他国の人々が崇敬する事は、熊野にもおとらず、万人が道を争って参詣した」とあるほどである。広峰神社は、中世から近世にかけて御師の組織をもつ

ていた。熊野や伊勢に代表されるように、民衆の信仰を支える重要な組織である。さらに重要なことは、広峰神社と播磨の渡来系文化の関わりである。吉備真備の創建伝説や、牛頭天王信仰・蘇民将来伝説など渡来系の巫覡と関わり深い信仰の拠点である。さらに古代から中世まで、今の広峰山は新羅国山（しんらくくに）と呼ばれ、新羅国という名称は、広峰山を中心として四方に連なる峰一円と山麓までを含む広い地域に及んでいた。このように広峰神社と朝鮮半島からの渡来人とのかかわりの強さと深さを連想させる。¹¹

以上、播磨と渡来系文化の関わりの歴史を簡単に見てきた。これらのことから、播磨がいかに渡来系の文化と濃厚な関係にあったかがわかる。そして播磨に花開いた皮鞣しもまた渡来系の技術であった。

三 日本最大の皮革地帯、龍野と姫路

兵庫県は、現在でも全国の八割近い製革の生産量を占め、日本の製革業の中心である。¹² 皮革に従事している地区は、龍野市、姫路市に集中しているが、川西市にもある。いずれも近くに河川の清流があり、交通の便のよいところである。なお、兵庫県では主に牛皮を鞣しているのに対し、豚皮は、後述する東京都墨田区（すみだ）の木下川地区（きのねがわ）が鞣しの中心である。ここには関西の牛、関東の豚という文化の違いが反映されている。

ここではまず、日本列島における皮革業の歴史を簡単にたどろう。¹³ その際、渡来系文化と不浄観を考察の軸にした。なお、同じ牛馬や豚の糞れを帯びるとされていた職業に屠畜業と皮革業があるが、屠畜業とは獣畜を屠殺し食肉を生産する産業で、皮革業とは獣畜の皮をはぎ、鞣して革にする産業である。

屠畜と食肉は縄文の時代から行われていた。皮の利用も行われていたとは想像されるが、遺跡から出土することはない。古墳時代の遺物として、大阪府狐塚古墳や三重県石山古墳などから革製の盾や甲の一部が出土している。奈良

県藤ノ木古墳から出土した馬具に鹿革の細片が発見され、これが西暦七〇〇年ごろだという。奈良時代の正倉院の宝物には、履物や武具、さまざまの革箱が納められている。

皮革の歴史において注目すべき史料がある。『日本書紀』仁賢天皇六年の条に、次のような記述がある。

「是歳、日鷹吉士、高麗より還りて、工匠須流枳・奴流枳等を献る。今大倭国の山辺郡の額田邑の熟皮高麗は、是其の後なり」

これは五世紀末頃、朝鮮の高句麗から高度な技術を持つ工匠を招いたことを示している。熟皮とは皮をやわらかく熟した鞣し皮のことである。このことが日本の皮革技術史の大きな転機となった。なお仁賢天皇は、父の市辺押常磐皇子いちのべのおしほのみこが雄略天皇に殺された際、弟とともに逃れ、播磨の縮見屯倉しむみのみやに隠れ住んでいたという。仁賢天皇は播磨との繋がりが極めて強かったのである。

中世では、一二世紀後半の「粉河寺縁起絵巻」や一三世紀末の「天狗草紙」に、庭先に皮を干している様が描かれている。このころ屠畜に従事したものは「屠児」や「穢多重」と言われ、賤視されるようになっていた。皮革従事者についてはわからないが、多くは屠畜従事者と重なっていたから、賤視されていたと思われる。

皮革に対する賤視が明示されている史料として、一五五八年信濃国諏訪下宮の物忌に関して「馬牛の倒れたるを取つて、捨てたものは当日の穢れ、皮を剥いだものは五日の穢れたるべし」という記述がある。また宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に「穢多というのは、インドのマラバールのポレアと同様に、日本で最も賤しい、仲間外れにされた賤民どもで、その職は死んだ獣類の皮を剥いでその皮を売ることである。彼等はまるでほかの人たちと交際するに値しない不浄な人たちのように、いつでも村落から離れて住んでいる」とある。

近世になると、死んだ牛馬の皮を剥ぎ鞣して革にする仕事は「かわた」身分のものが行なった。幕藩権力は、死ん

だ牛馬の取得権を与え、その権利を売却・譲渡することを禁じた。この権利を「旦那株」と言い、その範囲のことを「旦那場」と言った。このように既得権としての利益は保証されたが、身分と職業の固定化により、不淨視や差別もまた苛酷になっていったのである。⁽¹⁶⁾

明治維新とともに皮革業は大きく変わる。明治四（一八七二）年、「解放令」により身分的契機は取り去られたものの、「死牛馬勝手処理令」により経済的特権を失い、在方の小規模な皮革業者は困難に直面し、しかも差別は緩むことはなかった。一方で、近代制軍制の整備とともに軍靴・馬具等の皮革製品の需要が増した。また皮鞣しにも洋式技術が導入される。タンニンを使った鞣し法が普及し、それとともに皮革業者の規模も大きくなる。さらに第二次大戦後は、クロム薬品を使った技術がドイツから導入され、現在ではクロム鞣しが主流となっている。

話を播磨に戻そう。なぜ播磨にこれだけの皮革産業が成り立ったのだろうか。

まず何よりも皮鞣しに一番必要なのは清流である。その点、播磨は中国山地から流入する河川に恵まれている。兵庫県は皮草地帯を見ると、龍野には林田川、姫路には市川、川西には猪名川があり、その流域に鞣し業が集中している。

ついで重要なのが塩である。原皮の保存や皮鞣しの過程では大量の塩を必要とするからである。塩については、先に触れたように、瀬戸内は古くから渡来者たちの技術に基づく製塩が盛んであった。播磨と海をはさんだ向かいの小豆島では「かわや」身分のものが塩田を経営していた。彼らが生産した塩が、播磨の「かわや」に運ばれたのではない。沖浦和光は次のような推測をしている。

「小豆島の「かわや」は、播州の皮革製造業者と何らかの結びつきがあったのではないか。あるいは小豆島から原皮と塩を供給していたのかも知れぬ。古い時代から、この列島でも皮革の有数の生産地であった播磨平野は、

播磨灘を隔てて目と鼻の先にあった。(中略) このように小豆島と播磨国との地縁を考えてみると、小豆島に塩田を持つ有力な「かわや」が存在していても不思議ではない。おそらくその「かわや」が生産した塩は、播磨の「かわや」に運ばれたのだろう。そして、この小豆島の史料にみられる「かわや」という呼称も、播磨から伝わったのではないか¹⁷⁾。

播磨に限らず、被差別部落の間には、部落間に独自の交流を持つことが多い。まして播磨は被差別部落の人口が極めて多い。「かわや」が塩田を経営するという稀有な例だけに、もつと追求してみる必要がある。

そして皮革業を支える技術である。すでに見たように、播磨は渡来文化の一大拠点であった。多くの渡来人が住み着き、最新の技術をもたらしてきた地である。

また瀬戸内は水運が発達している。原皮を持ち込むにも、出来上がった製品を輸送するにも、瀬戸内の水運は大きな威力となった。近世では、摂津の渡辺村が最大の皮革加工センターであったが、龍野・姫路の皮革業者にとつて最大の取引先もまた渡辺村であった。¹⁸⁾

二〇〇四年の秋、全国大学同和教育研究協議会のシンポジウムが龍野で開かれた。シンポジウムの終了後に、武庫川女子大学の上山勝氏に龍野・姫路の皮革地帯を案内していただいた。近年では中国・韓国など外国からの安価な皮革輸入により、いずれのタンナー(鞣し業者)も経営が苦しくなっていて、閉鎖された工場も多かった。現在では多くのタンナーが薬品を使うクロム鞣しを行なっているが、近年の環境への意識の高まりから、天然の植物を利用したタンニン鞣しも復活してきていた。そして塩と菜種油だけで行なう最も環境にやさしい鞣しが、次節で詳しく述べる姫路・高木の白鞣しである。

佐賀県の唐津にある被差別部落を訪れたときに聞いた話であるが、その部落でも近世には皮鞣しを行っていた。地

理的な関係から、朝鮮半島から直接技術がもたらされたと思っていたところ、その地の鞣し技術も播磨からもたらされたものだという。そして製品は、はるばる大坂の渡辺村まで輸送し、骨は骨粉にして鹿児島に運んだとのことである。¹⁹

四 姫路・高木の白鞣し

姫路市高木地区は、播磨における皮革産業の拠点のひとつである。市川の清流のほとりに位置し、北方には広峰神社の鎮座する広峰山が聳えている。この地で、姫路の白鞣しとして古くから知られている技術を復活させようという動きが起きている。白鞣しとは水と塩と菜種油のみを使って行なわれる鞣しのことである。そうしてできた革は、ベージュに近い独特の白味を帯びた美しい乳白色で、柔らかな手触りで、ほのかな甘い香りをもっている。

姫路の白鞣しの歴史は古く、八世紀はじめに編纂された『播磨国風土記』の飾磨郡小川の里の記述に「品太の天皇（応神天皇）が夢前丘に登りて、望み見たてまへば、北の方に白き色の物ありき」とあり、これが白く鞣した皮革だという説を『花田村史誌』が取り上げているという。さすがにこの説は無理がある。一〇世紀でも播磨の皮革は鹿皮が中心であったから、牛皮を使った白鞣しはそれ以後のことである。²⁰

また、姫路の白鞣しは古くは古志鞣と呼ばれたこともある。その理由として、朝鮮半島から伝わった皮革技術は、越前を経由し出雲の古志に伝わり、そこから但馬の円山川に、そしてよりよい気候・水質を求めて南下し、市川に定着したからだという。また一人の聖が訪れて伝えたとか、神功皇后が韓国から連れ帰った俘虜が伝えたなど多くの説がある。²¹

それらの説の真偽はともかく、古代に朝鮮半島から伝わった白鞣しが、姫路の高木地区で行なわれていたことは間

違いない。播磨の中でも、この姫路・高木近辺は渡来系文化のきわめて濃厚な地である。広峰神社についてはすでに述べたが、その山麓一帯の地は、新羅国・白国と呼ばれている。これは新羅に由来する地名であり、そこに白国神社がある。そもそも広峰山自体が古代には新羅国山と呼ばれていたのである。また南には、渡来系豪族の墳墓とも見られる宮山・壇場山があった。

中世以降になると、多くの記録に姫路の白鞆しが登場する。享徳三（一四五四）年の鎌倉年中行事に「播磨皮の白き力革」という記述がある。さらに天正九（一五八一）年に、豊臣秀吉が織田信長に播磨の領有を命じられたとき、秀吉は播磨の産物として「滑革二〇〇枚」を献じている。江戸時代には、美しく柔らかで強靱な白鞆し革は、武具、馬具から皮硯箱、煙草入れ、料紙箱、財布、雪駄の花緒など多くの皮細工を生み、参勤交代の土産物として重宝されたという。シーボルトやフィッセルも、姫路の皮細工を特筆しているように、外国人の目にもとまるものであった。

明治以降では、ズボン吊りの革部分や帯革に利用されたり、強度があるので機械ベルトに使われたという。変わったところでは、戦前は野球ボール用にアメリカに輸出されていた。今ではアメリカのボール革はホルマリン鞆しのために、ボールが滑って変化球に向かなくなったとのことだ。

こうしたすばらしい伝統を持つ姫路の白鞆しであるにもかかわらず、明治以降のタンニン鞆しやクロム鞆しなどの洋式技術の導入によって、すっかり廃れてしまい、戦後になると伝統の白鞆しを行なうタンナーはまったくなくなってしまうていた。この事態に危機感をもって、伝統の白鞆しの復活を試みたのが、新田善仁氏とその甥の新田眞人氏である。

ここで簡単に白鞆しの技法を紹介しよう。原皮を数日から二週間、市川の清流に浸し、微生物の作用によって毛根をゆるめ脱毛する。これが「水あげ」という工程で、重労働であった。その後、「皮すき」、塩を加えて踏んでは干す

「もみ返し」、菜種油を加えては干し、洗つては干す「油皮もみ」「干し合わせ」「川洗い」、さらに揉んで干して伸ばしてたたむ「しいらもみ」「こい合わせ」「色付け」「干し上げ」を経て革の半製品になる。それを一ヶ月以上寝かせてから、市川に浸し、さらに揉んで干してヘラをかけて伸ばし乾かし、揉んでヘラかけを繰り返す「塩出し」の作業。そして最後に丁寧に皺を伸ばす「本ぶみ」をし、天気を確かめてから芝草の上に広げて夜露をとる「しめし皮」をする。最後の仕事は「皮のし」で、皮を極のくいに張りつけて乾かした後、折りたたむ。これで白鞣しの完成である。この間、三ヶ月以上を要し、根気が必要とする大変な重労働である。⁽²³⁾

白鞣しの特長は、何と言つても、まず革そのものの質がよいことである。強度があり色合いがよく、風味もある。そして製法が天然の塩と菜種油しか用いないので環境によいこと、このことは現在の皮革産業に対する重大な問題提起であろう。クロム鞣しは環境への悪影響が問題とされ、植物を用いたタンニン鞣しが増えているが、それ以上にこの白鞣しは環境に優しい。単なる伝統技術の復活ということを超えた、二一世紀に向けての積極的な意義の一つがここにある。

五 関東の豚皮鞣し——墨田区木下川

播磨が牛馬皮の鞣しの中心であるのに対し、東京都墨田区の木下川地区は豚皮鞣しの中心である。

木下川地区では全国の豚革の八〇%が生産されており、墨田区の大きな地場産業となっている。ここでは鞣しの過程ごとに分業化が進んでいて、小さな工場が集まり、町全体がひとつの工場のようになっている。木下川を軸としたネットワークは関東一円に広がっている。原皮の調達は、芝浦、草加、厚木といった関東近県の屠場のみならず、会津や名古屋からも調達している。昔はロシアからも輸入したが、今では国産原皮だけを扱っている。

また皮革だけでなく、廃油回収リサイクルやラードやコーラーゲンなどを精製する油脂産業も盛んである。しかし労働の厳しさと差別偏見による労働者不足で、現在では外国人労働者が皮革産業を支えている。このあたりの事情は、姫路や龍野と同じである。

こうした現在抱えている問題は後で触れることにして、まずは木下川地区の歴史を見ておこう。²³木下川で皮革業が行なわれるようになる前提として、この地における被差別部落とのかかわりをとらえる必要がある。木下川は播磨と違って、皮鞣しの伝統が歴史的にあった地域ではなく、明治になってから強制移転によって作られた皮革の部落なのである。

木下川地区に入々が住み始めたのがいつかはわからないが、史料上は、一三九八年の「下総国葛西御厨子注文」に「木毛河」という記述があり、木下川薬師には一四二六年の古文書があるという。江戸時代の「新編武蔵風土記稿」によれば木下川地区は農村で、土地柄は低湿地で葦の生い茂った中に農家と農地が散在していた。

史料上から皮革との関係が明らかになるのが、「木下川地区のあゆみ」に紹介されている、寛政一二（一八〇〇）年、浅草・弾左衛門が町奉行所に提出した「弾左衛門書上」である。引用しよう。

一、二百三十二軒 浅草新町弾左衛門構内

外に猿飼十五軒

一、七百三十四軒 当地にある小屋分

内三百六十八軒 浅草小屋頭善七の手下

二百三十六軒 品川小屋頭松右衛門の手下

七十三軒 深川小屋頭善三郎の手下

五十軒 代々木村小屋頭久兵衛の手下

七軒 木下川村小屋頭久兵衛の手下

一、五千三百四十二軒 関八州・伊豆・駿河・甲斐・陸奥十二カ国の分

外に猿飼四十六軒十二カ国に居る分

この記録から、弾左衛門配下の非人頭の一人として、木下川に久兵衛が住み、その配下が七軒だったことがわかる。江戸の町の膨張に伴い、河川や水路の見回り、清掃、芸能などの仕事と役割を主に担っていたと推定される。さらに、弾左衛門は、浅草新町に住み、江戸時代には、関東一円にわたる牛馬の皮革の販売権をおさえていた。その配下であったことから、木下川も皮革との関わりがあったと想定できるのである。

木下川が本格的に皮革の町になるのは明治になってからである。悪臭を放つという理由から、皮革業者の市外への強制移転が図られる。明治六（一八七三）年の東京府知事の通達で、市内の皮革業者が浅草に移転させられ、さらに明治二五（一八九二）年には警視庁による「魚獣化製場取締規則」の布告によって、一九〇二年までに市内の工場は市外へ移転することを余儀なくされた。浅草の皮革業者たちに、このとき移転先と指定され、新たに皮革産業地域として形成されたのが、木下川と荒川区三河島だった。木下川には、明治一〇年代後半から皮革工場が作られていたが、本格的な皮革製造地帯としての歩みはここに始まったのである。以後、近代化や軍需によって皮革産業は好景気を迎えることになる。

木下川の皮革の歴史において、もうひとつ特筆すべきことがある。浅草から木下川へと皮革業が移っていく中で、その産業を支えたのが滋賀県からの移住者たちである。滋賀県でも、愛知川町の山川原と米原町甲田という二つの地域との結びつきが強い。両地区とも江戸時代から知られている皮革業の行なわれていた地域である。古くから彦根藩

は食肉・皮革関連の産業が盛んで、江戸時代には將軍への献上物が近江牛の味噌漬であったことはよく知られている。付言すれば、滋賀県の湖東地帯も渡来系氏族の拠点であった。

その滋賀県から職人たちが最初にやってきたのは一八七二（明治五）年のことで、山川原から来た人たちが浅草新谷町に居を構えたという。その後、家族や親戚の伝手をたどって山川原、甲田の人々が次々と訪れ、新谷町に住み着き、皮革業に従事していった。木下川に移転してから後も、滋賀県から多くの職人が住み着いた。そして木下川や三河島の皮革工場には、かなり早い段階から中国人・朝鮮人の外国人労働者がいたという。

こうして関東最大の皮革産地になった木下川は、戦時統制、戦後復興を経て、高度経済成長とともに大発展した。⁽²⁵⁾ 現地で聞いた話では、当時、職人たちの羽振りはよく、最新型の外国車を乗り回したり、派手に遊び暮らした人も多かったという。

しかし合成皮革の誕生や、慢性的円高不況、労働者不足、安価な外国製品の輸入などによって、今の木下川は苦境に立たされている。先述したように、木下川は町全体がひとつの工場のようになっているので、一つの倒産が連鎖的に影響するという。さらに厳しい差別によって木下川を離れる人が相次いでいる。地域で待望され、一九三六年に開設された木下川小学校は、生徒の急減によって二〇〇三年に廃校になってしまった。

いかにして差別をはね返し地域の活力を取り戻すか、そのために「すみだ皮革まつり」などの取り組みがなされている。

六 日本文化史の書き換えに向けて

これまで、渡来系文化の遺産である播磨の姫路・龍野や、非人地区を基盤に成立してきた墨田・木下川という二つの皮革地帯の歴史と現在を見てきた。いずれの地も、厳しい差別の現実²⁶に直面しつつも、日本文化史上、極めて重要な位置を占めている皮革産業を担ってきたのである。その意味でも、本稿の冒頭に述べた多様な日本文化の諸相を捉えなおし、今はまだそこかしこに露見しているものの、消え去りつつある人々の営みを考えるには欠かせぬところである。

しかし、もう一步踏み込んで考えるならば、そこに横たわっているのは皮への穢れ意識である。そもそも皮革業に従事する人たちが厳しい差別に直面せざるを得なかつたのは、差別する側の皮に対する穢れ意識があつたからである。最後にもう一度、皮の穢れについて触れておこう。

そもそも「穢れ」とは何か。²⁶

民俗学では、ハレ・ケ・ケガレの三極循環論によつて説明されている。それは、日常のケの世界を支える「氣」が離れて枯れている状態が「氣枯れ・氣離れ」で、それを賦活させるのためにハレの儀式がある。その「けがれ」が不浄とされ、触穢観念と結びつき、神事などの参加へのタブーとなつていった。日本の各地では、特に農村や都市において死穢、産穢、血穢の三不浄の観念に加えて、殺生との関連で、肉、皮などに従事する者には穢れがあるとされてきた。汚いとか臭うという物理的な嫌悪感を超えて、精神的な嫌悪感を持つていたのである。さらに穢れは伝染するといわれ、それが排除になり差別になつてきた。

中沢新一の見解によれば、芸能民や職人は、縄文以来、この列島にあまねく存在していた古層の神々の世界との深いつながりを持つゆえに、常民から畏怖されると同時に差別と排除を受けたといふ。²⁷

穢れという概念は、律令や仏教などとともに、大陸から渡ってきた概念である。渡来の観念が、渡来の技術者を差別する基礎を作ったというのも皮肉である。差別する側にあつた漠然とした嫌悪感は、権力によって増幅・強化され支配の道具となった。近代以後のさまざまな解放運動や教育によって、差別の理不尽なことは知られるようになってきたが、差別意識を払拭するにはいたっていない。

いま、日本文化史の書き換えが迫られている。従来の日本文化史は、畿内・京都の宮廷文化や近代以後の東京を中心として、「ひとつの日本」を描くための方法論であつた。だがそこからは隠蔽されてきた歴史がある。伝統的な祭祀者として、天皇を日本文化の中心に位置付け、統合の象徴としようという考え方も一部にある。しかしその祭祀観は、はたして妥当と言えるだろうか。血の穢れの観念にしても、沖繩では、ノロ（祝女）は月経を聖視していたとい²⁸う。明らかに畿内を中心とした王権の支配下で形成された触穢思想とは異なっている。

日本社会の隅々に埋もれている営みの価値を発見してゆくこと、その文化的な評価をきちんとしてゆくこと。そうした作業を続けていくことによって、この列島の新たな文化史がいつそうダイナミックに書き著されてゆくだろう。それはもはや「ひとつの日本」の呪縛を離れ、地域が生きいきと立ち上がり、沖繩や東北、熊野というまつろわぬと言われた者たちの文化に新たな価値を見出すのみならず、さらに海を媒介にしてアジアにも開かれた「日本文化史」となるはずである。

注

(1) 赤坂憲雄「日本像の転換を求めて」『日本を問い直す』岩波書店、二〇〇二。

- (2) 以下、中沢の引用は、中沢新一『精霊の王』講談社、二〇〇三。
- (3) 「古事記では天之日矛。新羅の王の子で、日本に渡来したことが、日本書紀では垂仁三年条に、古事記では景行段に載る。タジマモリ、神功皇后の母の祖にあたり、その系譜伝承は、神功皇后と新羅との関係の深さと、天皇の天下が朝鮮までを含む所以を示す意味をもつ。」(『日本史辞典』岩波書店、一九九九)。
- (4) 沖浦和光「播磨国と渡来系文化——芦屋道満伝説をめぐって——」『研究紀要第五集』財団法人兵庫県人権啓発協会、二〇〇四年三月。
- (5) 「播磨国風土記」日本古典文学大系二『風土記』岩波書店。
- (6) 上山勝「奥播磨の製鉄史——たたらの解明——」私家版。
- (7) 「播磨国風土記」日本古典文学大系二『風土記』岩波書店
- (8) 堀一郎『我が民間信仰史の研究(二) 宗教史編』東京創元社一九五三。
- (9) 沖浦和光「陰陽師の原像——民衆文化の境界を歩く——」岩波書店、二〇〇四。
- (10) 川上隆志「日本文化史における秦氏——秦河勝と播磨・大避神社を中心に——」『現代の理論』二〇〇六年四月。
- (11) 川上隆志「播磨・広峰神社の御師——民衆信仰と渡来系文化をめぐって——」『文学研究』第九三号、二〇〇四年四月。
- (12) 上山勝は、日本タンナーズ(全国皮革技術者協会)の資料をもとに、一九九八年度の生産量を紹介している。(上山勝「姫路白鞣し革の歴史」『兵庫県人権開発協会研究紀要』第一集、二〇〇〇)。これによれば、全国のうち兵庫県の占める割合は七六・八%である。筆者が二〇〇四年に龍野で聞いたところでは、現在でも変わり

はないとのことである。

- (13) 皮革の歴史については以下の文献による。小林行雄『古代の技術』塙書房、一九六二。寺木伸明「屠畜と皮革」『さまざまな生業』岩波書店、二〇〇二。武本力『日本の皮革』東洋経済新報社、一九六九。「荒川部落史」調査会編『荒川の部落史——まち・くらし・しごと——』現代企画室、一九九九。木下川沿革史研究会「木下川地区のあゆみ」『明日を拓く2・3』東京部落解放研究会。
- (14) 『日本書紀』上、日本古典文学大系六七、岩波書店、一九六七。
- (15) 以下の史料は、寺木伸明前掲論文による。
- (16) 寺木伸明前掲論文。
- (17) 沖浦和光『瀬戸内の被差別部落——その歴史・文化・民俗——』解放出版社、二〇〇三。
- (18) 杉之原寿一他『地場産業の展開と地域社会の総合的研究——播州皮革産業を中心として——』昭和六〇年度科学研究費補助金研究成果報告書、一九八六。寺木伸明前掲論文。
- (19) 佐賀県部落解放研究所・佐藤久子氏にうかがった。
- (20) 小田猛『古代播磨と生産技術』学習研究会教文社、一九八七。
- (21) 小田猛『古代の技術と播磨考』培養社、一九八〇。
- (22) 上山勝前掲論文。
- (23) 上山勝前掲論文、および新田眞大氏のご指示による。
- (24) 木下川地区の歴史については以下の文献による。木下川沿革史研究会前掲論文、木下川沿革史研究会編『木下川地区のあゆみ・戦後編』現代企画室、二〇〇五。「荒川部落史」調査会編前掲書。

- (25) 木下川の職人たちの生活については以下の文献による。北川京子「木下川に生きる——日本一の皮革産業の町から——」『別冊東北学』7、作品社、二〇〇四。関野吉晴「木下川・職人たちの軌跡——東京都墨田」皮革の町」を生きたる職人たちの現在——」『別冊東北学』7、作品社、二〇〇四。
- (26) 穢れについては以下の文献による。沖浦和光・宮田登『ケガレ——差別思想の深層——』解放出版社、一九九九。『部落問題・人権事典』部落解放・人権研究所、二〇〇一。『日本民俗大事典』吉川弘文館、一九九九。
- (27) 中沢新一前掲書。
- (28) 沖浦和光・宮田登前掲書。